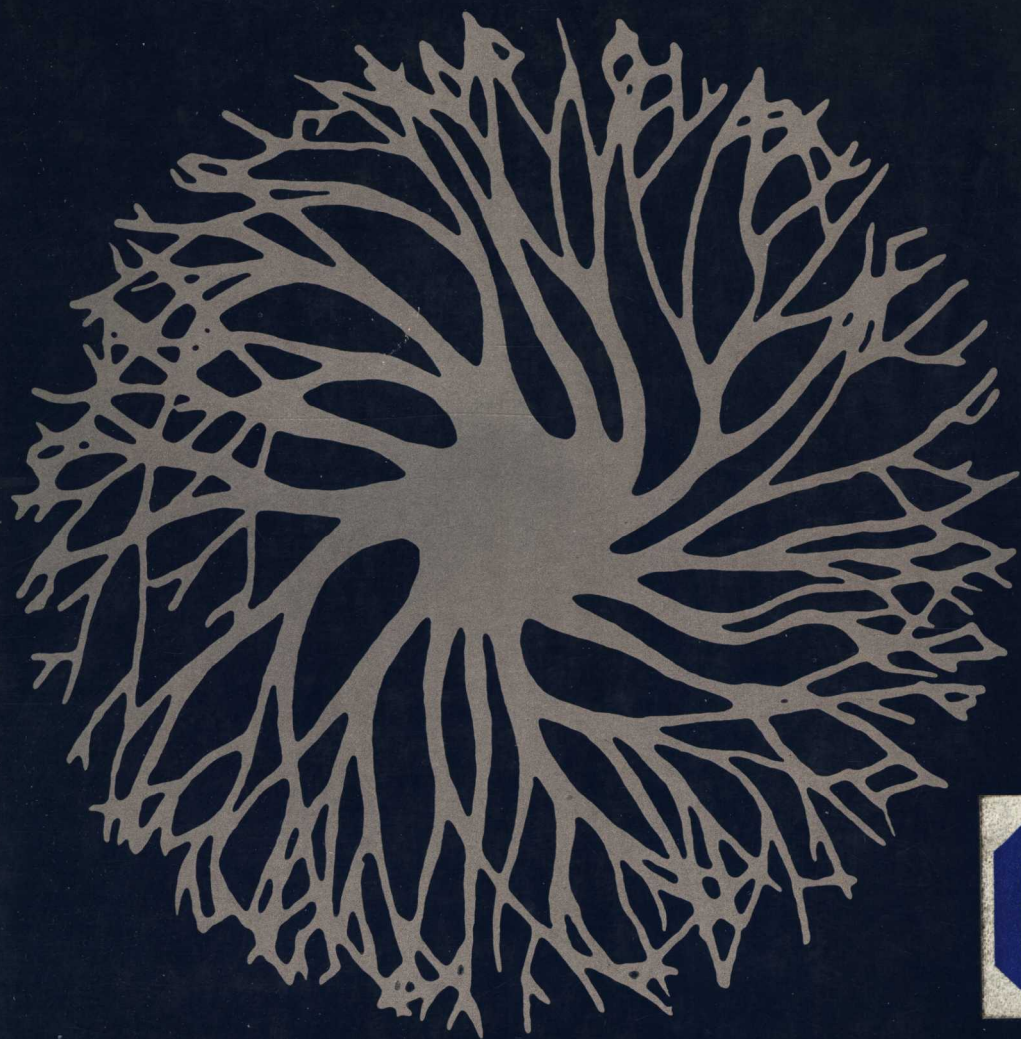


世紀末文化を読み解く

『へるめす』編集部編



112
J02
803

世紀末文化を読み解く

『へるめす』編集部編

岩波書店

世紀末文化を読み解く

一九八六年二月一八日 第一刷発行 ©

定価 一三〇〇円

『へるめす』編集部編

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・二五五・二二〇
振替 東京六二六四〇

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-001169-3

目次

歌舞伎町から三浦さんまで―性風俗と現代社会―	1
------------------------	---

河合隼雄／前田 愛

世紀末のガイジン―日本人の異文化理解をめぐる―	57
-------------------------	----

井上ひさし／ロジャー・パールバース

子どもたちが見えない―教育するとはどういうことか―	103
---------------------------	-----

中村雄二郎／矢川澄子／山中康裕

スポーツ全盛時代―人間にとって健康とは何か―	163
------------------------	-----

宇沢弘文／C・W・ニコル

歌舞伎町から三浦さんまで

性風俗と
現代社会

河合隼雄
前田愛

テクノロジー化したセックス産業

セックスとテクノロジーのパターンは同じ

性の言語化と性の洗練

隠れた神としての性

消え去る女性と美的完成

ホモ・セクシュアルと武の伝統

象徴としての結婚

キリスト教への挑戦

性の自由とは

自然主義文学と性

恋愛小説の不可能性

児童文学にみる若者の困難な生

男の目と女の目

可能性としての男性と女性

強い父とグレート・マザー

現代日本のかかえる問題

〈河合肇雄〉

心理学者、一九二八年生まれ。京都大学教授。

ユング派の深層心理学の手法を駆使し、心理療法に従事するとともに、東西文化の比較に基づいて日本の社会と文化を鋭く分析する。近年は宗教と科学の接点を探り、独自の思索を展開しつつある。

著書に『中空構造日本の深層』『昔話と日本人の心』『コンプレックス』はか多数。

〈前田 愛〉

国文学者、一九三二年生まれ。立教大学教授。

幕末・維新期の文学の実証的研究から、都市論、文学テキストの記号論的解説にいたるまで、幅広い関心と斬新な視角で迫る。日本の文化的土壌に育まれた社会風俗への造詣の深さは、今回の対談でも一層際立っている。

主著に『幕末・維新期の文学』『樋口一葉の世界』『都市空間のなかの文学』ほか。

◆テクノロジー化したセックス産業◆

河合 実は、最近アメリカ人の友達が来まして、日本に着いたときに歌舞伎と一緒に見ることにしていたのです。彼はタクシーに乗りまして「カブキ、カブキ」と言うたらしいんです。そうするとタクシーが連れて行ったところは、どう考えても歌舞伎とあまり関係ないようなんです。歌舞伎の手振りなんかすると、よけいに運転手さんは確信をもって、ここだ、と言う（笑）。それで大分遅れて歌舞伎座へその学者が来たんです。話を聞いて我々は大笑いしたんですが、僕は、演劇の歌舞伎のほうも、彼が間違っって行った歌舞伎町のほうのことも知らないんですね、今日はちょっと勉強してきたんですけれども。

日本のセックス産業といったものの実態は、やっぱり外国ともずいぶん違うという感じを受けますし、僕が非常に感じたのは、以前よりもジメジメしてないんですね。どこかアツケラカンとしたところがあって、それが一番特徴的だと思いましたね。

大体男性というのは、セックスのことが関係した、そのときだけ一時的にちょっと分裂する。生理的要求が前面に出てきて、しかも終わった後に急に分裂が終わってしまっって、何とも言えん悔恨の念というのが出てくる。

前田 索漠とするということですか。

河合 そうそう、索漠としたりする。ところが相手をする女性のほうは、もともとあまり分裂がな

いわけだから、昔はただ忍耐したり、涙ながらにとか、金儲けのためにしたりしていたわけでしょう。ところがいまは、ちょっと本とか週刊誌の記事を読んでもみると、女性の心の分裂あるいは心と体の分裂がものすごく見事なんですね。あまりにも割切っている。女性のほうが分裂していると贅りはないわけですね。贅りというのは何かと何かの重なりによって生じるものです。だから、女性側に贅りになさすぎる。男のほうがアップアップしている。そんな印象を私は受けたんですが、いかがですか。

前田 それはその通りだと思いますね。日本のセックス産業というのは、テクノロジーの点では世界一、二の国ですね。セックスのテクノロジー化が非常に進んでいると思うんです。

いま河合さんがおっしゃった、贅りがないというのは通ずると思うんですけども、たとえば「ソーブランド」というものがありますが、僕がそれで連想するのは、ファミリー・レストランです。車に乗って行くと、どこもかしこも同じような店構えで、サービスについても実にきっちりマニュアルが出来上がっているわけですね。「ソーブランド」もまた、そういうマニュアルが実に厳密に出来上がっている。お客はそういうベルトコンベアーに乗って流されていく。もともと、客の方では、そういうマニュアルやコンベアー・システムをどのように崩して行くかということを一方では考える。昔の廓というのは、おっしゃるようにジメジメしたところがあり、また贅りがたくさんあったと思うんですけども、現在では、そういう贅りは消えてしまったわけですね。

これは前からの自説だけれども、「ソーブランド」というのは一種の密室になっていますね。昭和三〇年に団地というものが出来て、日本人が密室の空間をわりあい日常的に体験するようになったんですけれども、そういう団地の空間とか最近数多く誕生している高層ホテルの空間は、実は「ソーブ

ランド」と同じである。さらに言えば、地方の観光地のホテルも建売住宅もみんな同じ構造になっている、と思うわけですね。

セックス産業は、もちろん世界中にあるわけですが、日本の場合は、非常に発達し、テクノロジー化されすぎたんじゃないか。たとえば、ラブホテルでビデオを映すということがありますね。あれは非常に奇怪な仕掛けなんだけれども、これもまさに日本のテクノロジーがそういうところまで入ってきている証拠の一つですね。

性というものは人間の身体的なものに一番結びつく何かだった、そして光の部分があり、影の部分があるという領域だったんですけれども、影の部分が確かにこそげ落ちているということですね。

いま二つの歌舞伎の話が出てきましたが、新宿の歌舞伎町には、のぞき劇場というのがたくさんあるんですね。真ん中に円形があって、そこで女性がヌードになる。そして周りに個室があるという構造。これは例のペンサムのパノプチコン——やっぱり円形で、中央に監視塔があって、周りには個室があり、そこで囚人が監視されている——を逆に裏返したようなものだと思うんです。

ロンドンにソーホーという、ロンドンの歌舞伎町みたいな一角があるんですけれども、のぞき劇場はソーホーから始まったということですね。ところが、いまや本家本元のソーホーよりも日本の歌舞伎町のほうが進んでしまっていると思うんです。たとえばストリップ劇場の場合には、そんなにテクノロジー化されていないわけでしょう。そこではいろいろ演技があり、客席と舞台との間でいろいろな交歓がある。それを楽しみに行く人もたくさんいるわけですが、のぞき劇場の場合には、そういう要素は全部切れている。透明な一種の装置いわばホログラフィーみたいなものになっているわ

けで、これもまた、テクノロジ化のあらわれです。

それから新宿の歌舞伎町ですと、前はビニ本という、ビニールに包まれた不思議な本をたくさん売っていたんですけれども、ところがこのところビニ本は、売っていますけれども、ほとんどオマケに近くなって、ポルノビデオのほうが目玉商品になっている。これも、セックス産業のテクノロジ化の一つの側面と言っていると思うんですけれども、世界中のどの国よりも日本がテクノロジ化が進行しているんじゃないか。

◆セックスとテクノロジのパターンは同じ◆

河合 それ非常におもしろい指摘で、前田さんのおっしゃるようにセックス産業のテクノロジ化としてとらえることもできるんですけれども、一番初めに言われたように、セックスに対するアプローチの仕方そのものが、日本人がテクノロジに対してアプローチしているパターンと、まさにそっくり同じだと思いますね。その点が非常におもしろいですね。

ヨーロッパへ行ったら僕らが非常に痛切に感じるのは、彼らがテクノロジに対する抵抗力というものをすごくもっていることですね。それで、なかなかテクノロジを簡単に摂取しない。

実は僕は数日前まで、毎年スイスのアスコナという所で開かれるエラノスという会議に行っていたんですけども、その会議で録音に使っている機械が、まだテープをリールで巻くやつで、しかも大きい図体のものなんです。またどこかの放送局が取材に来ていまして、その記者が肩からかけてい

るレコーダーが、まだカセットじゃないんですよ。放送局の取材記者は、言ったらジャーナリズムの先端をいつている人たちでしょう。ところが彼らはそういう古い機械を平気で使っているとか、一旦もったものをなかなか簡単に変えない。それはスイスの田舎なんかに行くときよく見かけますけれども、古い道具をずっと使っていますね。なかなか近代化しない。それはなぜかというと、テクノロジというものをうっかり取り入れると、自分の自我が侵害されるという感じを彼らはもっているからだ、と思うのですね。

日本人は、古いものをもっていると、あいつはだめだ、と仲間に入れてもらえない感じだけれども、ヨーロッパの場合には簡単にテクノロジーを取り入れると、一個の人間としてこの世に存在し難いと考えられているようです。いまのセックス産業の取り入れ方というのは、新しいものをどんどんどん取り入れていかないと——取り入れるということは自明の理であって——しかも新しくなければだめだという点で、テクノロジの場合と似ていますね。

そういうことを考えているヨーロッパの人にしてみれば、日本はこれだけテクノロジーを無制限に取り入れて、それを進歩と考えているけれども、そのうちに日本人はやられてしまうんじゃないかと心配するわけです。ところが、なかなかやられていないわけでしょう、日本人は。結構うまくやっているわけですね。セックスの場合と非常に似ています。テクノロジとセックスをパラレルに考えるというのは、ですから大変おもしろい考えたと思いますね。

前田 日本は産業ロボットを一番たくさん導入している国ですね。ロボットに、たとえば百恵ちゃんとか聖子ちゃんとか、そういうスターの名前をつけているとかという話がありますでしょう。

河合　　あります。

前田　それから、これは昔からよく言われているようなことですけれども、ヨーロッパの人間は、人間と動物との間にはっきりと一線を入れる。我々の場合には、そういう境界線というのは非常に曖昧なんですね。

河合　　そうそう。

前田　それは動物だけじゃなくて、ものに対して、一線をひくというより、非常に曖昧な形で対しているわけで、これだから単にフェティシズムというふうに呼んじゃうと……。

河合　　西洋的な……。

前田　感覚になっちゃうんじゃないかと思うんですね。

河合　　そうですね。

もう一つ思いますのは、セックスのいま言ったような方というのは、どんどん先行していくでしょう。そして、本当は、テクノロジーの受け入れにしろセックスの現象にしろ、本当に考え出すと、思想的にはそこそ非常に大きい問題だと思えますね。ところが、そういうことはだれも取り上げない。というよりも、取り上げられない、と言ったほうがいいと思うんですね。風俗のほうが思想に先行して進んでいくところがあるでしょう。これが日本の特徴で、逆に言うと、思想的なものもすぐに風俗化されて風化していく。

たとえば学生運動が非常に盛んだったときでも、初めのうちは思想的なものがあつたんですけれども、あとはすぐに風俗になってしまったでしょう。それでついに風化してしまう。そういうパターン

が日本に多すぎる。だから、僕らは逆に、こういう風俗からむしろ思想を吸い上げるとするか、そのくらいのファイトが要るんじゃないかと僕は思っているんですね。あんまりそういう傾向がすさまじいのでね(笑)。

◆性の言語化と性の洗練◆

前田 そこは非常に対照的だと思うんですね。つまりセックス産業でも、性風俗でも、確かにおっしゃるように先端的なところへいつているんですね。それと見合う言説のほうは、文学作品という形では結構氾濫しているわけですが、そうじゃない論説、批評に関しては非常に貧弱ですね。

河合 そう、ものすごい貧弱なんです。そしてまず出てくる論説は何かといたら、ボルノの取り締まり、そういうことではない。「この乱れをどう取り締まるか」とか。しかし、そんなのは全然意味が違うのでね。

前田 いまの性についての発言ということを考えると、日本はヴィクトリア時代みたいなところが多分にありますね。

河合 そう思いますね。

前田 黙っていること、言わないということ自体がタブーを構成していることに、ほとんどの人が気づいていない。これは一体どうしてかな。

河合 それは僕は、問題があまりにもむずかしすぎるからだという気がしますが、

いま、セックス産業とかいつているけれども、言ってみればセックス産業は人類が始まって以来ずっとあるわけですね。いまの方が、さっき言われたようにテクノロジー的なものが入って来て、僕らは非常にびっくりするんだけど、歴史的に見ていけば、昔からずっとあったわけでしょう。そして日本の場合、日本古来のものが相当ありながら、まだ本当に研究されていないんじゃないかなという気がするのですね。

そして、西洋文化との接触で、急に付け焼刃のキリスト教倫理観が入ってきたわけでしょう。僕はよく冷やかすんだけど、日本人の普通の男はキリスト様と孔子様の二人に監視されている(笑)。西洋人は厳しいといったってキリスト一人ですからね。こっちは二人もおられるので、まったく身動きがとれない。それに対して、その逆転を試みる人は、いやそんなことはない、日本はセックスについてはおおかであった、とか言うわけですね。でも、それだけだったら裏返しするだけであって、おもしろくない。歴史的な意味で、もう少し言えるところがあるんじゃないですかね。私は、文学の世界が一番頑張って書き上げてきている、と思うのですが。

前田 まあ、そうだと思いますけれどもね。

この前亡くなったミシェル・フーコーが、『性の歴史』の第一巻で、こういうことを言っているんです。西洋と東洋——東洋と言いますと中国、日本、インド、中近東、それから西洋でも別格として古代ローマを入れているんですが——のそれぞれの性のあり方についてどういうことになるのかというと、つまり東洋のほうはアルス・エロティカ、つまりもっぱら愛の技術を洗練する文化であるとい

うんですね。西洋は、スキエンティア・セクスアリス。性についての知識を組織だてる、性の科学を構築する文化。そういう分類をたてているんです。

ではなぜ西洋の場合、性についての知識が体系化されていくか、その一番の根源は、フーコーによれば、キリスト教の懺悔告白ということですね。これはまた、懺悔聴聞僧のほうで、どういうぐあいにそれを聞き取ったらいいかというマニュアルが出来上がっているわけですね。罪はいろいろあげられるけれども、その中の性に関する罪を告白する。そうすると、性についての行為、体験をいつも言葉に変えているわけですね。それを何百年とやってきている、そういう伝統がある。ところが東洋のほうには、宗教の制度として懺悔告白というものがない。そこが東洋と西洋の非常に大きな違いだということを言っているんですけれども、これはいまの河合さんのおっしゃったことと、どこか結びつくように思いますね。

河合 そうですね。西洋人の言語化しようとする努力には本当にいつも僕らは感激するんだけど、セックスほど言語化しにくいものはないわけです。だから結局、懺悔聴聞僧がいろいろ言語的な武器をもってやっているうちに、どこかおかしくなってくるわけね。その辺は西洋の文学が非常に喜んで対象にしているところだし、『ボッカチオ』じゃないけれども、文学が「だめじゃないか、その知識体系は」という、ものすごい破壊力をもって宗教を突き上げてくるわけですね。そして突き上げられて、まだ頑張る。さらに言語化するわけですよ。そういうものの何度とない繰り返しを西洋の場合はやってきたんじゃないでしょうか。

ところが日本の場合、セックスという非常に途方もないものを、あるものとして受け入れるかわ

りに、それを言語化するんじゃないくて、生き方の中でどう洗練していくのかという方向にもっていったように思いますね。あるということはすばらしいことなんだ。こういうすばらしいことがあるんだから、という方向へもっていく。だから、罪という意識とは非常に遠いでしょう。セックスについて日本の場合。

前田 いまの懺悔という事で言いますと、ヨーロッパのポルノグラフィの傑作は、語り口が懺悔の調子になるのが非常に多い。

河合 そういえば、告白譚として書かれるのが多いですね。

前田 確かにポルノグラフィは、一人称のほうに迫力があるんですけども。だから古典で言いますと、一八世紀に有名な『ファニー・ヒル』というのがあります。あれはその当時手紙体の小説が非常にはやっていたということがありますが、若い娼婦があるマダムに自分の体験を語るという形式になっているんですね。これもそのもとを遡れば、やはり告白、懺悔の形式、その一種のパロディーになっている。そういうことだろうと思うんですね。

ところが日本の場合には、そういうふうにはならない。いまおっしゃったように、それが罪であるから告白するのではなくて、まさに美的に洗練を加えていく。ですから、先ほど申しましたアール・エロティカということで言えば、たとえば江戸時代には、そういう文学が実に繁昌した時代ですが、たとえば洒落本とか人情本とかありますけれども、これはそういう男女の出会いの形式ですね。洒落本というのは遊廓が舞台だし、人情本は、深川だとか向島の郊外での、そういう牧歌的な恋愛を書くわけです。そして恋人たちが出逢う場所の舞台装置に非常に凝るわけですね。そして、確かにそ

の中には儒教的な教訓を、ところどころ申しわけみたいに入れているんですけど、だれもそんなのは問題にしないわけですね(笑)。

河合 文部省の検閲みたいですね。

前田 たとえば、庭に打ち水がしてあって、蚊帳を吊ってその中で二人が眺めているとか、締切った障子が濾過装置になって隣りの家から清元の三味線の音が流れてくるとか。またこれは永井荷風がはめているところですけれども、接吻をする前に梅の蕾をちょっと口に含んでとか、そういう洗練の仕方になるみたいです。

河合 僕は、日本では、美しいということになるんじゃないか、と思うんですね。それをどういうふうに上手に描くかというだけじゃなくて、結構庶民も、ある程度そのように生きてたんじゃないでしょうか。そういうことは、やろうと思えばできたわけだから。

前田 ヨーロッパの場合には悪名高い貞操帯というのがありましたね。あれが実用に供されたかどうかは非常に疑問があるんですけども、ああいう禁圧の道具、あるいは機械というものは日本では、僕が知る限りでは、全然ありませんね。貞操帯とは反対に、中世ヨーロッパの甲冑がある時期になると男性のシンボルを誇張するようなものをつけるわけですね。そんなものがなくなっちゃって戦闘には差し支えないんだけど、そういうものを突出させておく。これも敵を威嚇するデモンストレーションの一つなんでしょうけれども、甲冑にそんなおかしなものをつけるという発想と、貞操帯で禁圧するというのは、これはやっぱり表と裏だと思うんです。ところが日本の甲冑を見ても、そういうものがくっついた例は、多分ないと思いますね。